

こころに存在するカオス（混沌）の表象を追う

—神話・科学の領域と分析心理学の観点からの検討—

三田 桂子

1. はじめに

心理療法の過程では、様々な局面でカオス的な表現や状態が生じることがある。それらは秩序の破壊、混乱、融合性などを伴って、語りや箱庭、夢、プレイセラピーなどの表現に見受けられたりする。また自然災害、突発的な事故、個人・社会・政治による暴力、病による余命宣告など、予測できない事態に遭遇して内的世界が大きく揺さぶられ、混沌とした状況におかれることもあるだろう。このようなカオス的な様相について、人々のこころはどのような表象を培い継承しているのだろうか。また時代の変遷によってカオスの表象に変化は生じているのだろうか。古より伝わる数々の神話では、「カオス（混沌）」の存在から語られて世界が創成された後、神々が登場して物語が展開する。他方、現代の科学領域では、カオス理論が学際的に注目されている。この動きは19世紀に熱力学が登場し、カオス的な現象が科学の観察対象に含まれたことから始まる。さらに現在では量子力学が発展し、自然界のカオス的な現象について観測の不可能性を認め、科学的なものの見方が根本的に変化している過渡期といえよう。このようにカオスの表象は、神話の世界創成から現代のもの見方まで、人間の存在基盤に深く根ざしていると考えられる。

そこで本論では、心理療法におけるカオスの表象について理解を深めることを目的として、古来の神話領域、現代の科学領域におけるカオスの表象を汲み出し、心理臨床的な意味を探索する。検討にあたって、深層心理学の一つである Jung の分析心理学の観点を足掛かりとする。その理由は、Jung は内的体験と表象を理解するために、神話の理解を重視すると共に、中世の化学である錬金術¹のイメージからこころの深層を研究した背景をもつからである。本来の科学的な思考とは、古代ギリシア時代より自然哲学という自然と人間の対話の方式として展開し、時代性、宗教性、社会的背景と密接に絡み合い、わたしたちの世界のもの見方、つまり世界観についての基本的なモデルを提供するものである。この点において、神話と科学の領域を含めて、こころの深層にあるカオスの表象を検討することは、現代的な意義をもつといえる。

さて、本論ではカオスの日本語訳として混沌（または渾沌）を同義とみなすが、それぞれの

¹ 錬金術は、物質の性質の認識とともに、内界のこころの暗闇を認識するためにも役立つものと述べている(Jung, 1958 / 1994)。

語源には意味の違いがある。カオス (chaos/khaos) はギリシア語を語源とし、口を大きくあけている、あくびをする、という空洞の意味をもつ。その後、火風水土の四元素説がもちこまれた後、カオスに混沌の状態を表わす意味が獲得された(Kerenyi, 1962/2000)と考えられる。一方、日本語の混沌(または渾沌)は、漢字のサンズイに表れるように「水が激しく流れてわきたつこと。転じて、一切が未分化で秩序のない状態」(森, 1994)と水との関連をもつ。本論のテーマとしてカオスと混沌および渾沌を同義として扱うが、この語源的な特徴の違いを検討する必要がある場合、その差を明示して論じる。

2. 神話領域におけるカオス

2-1. 世界創成神話について

自然生成型と呼ばれる世界創成神話では、神が出現する以前に、自ずより世界が生じるかたちによって世界の起源が語られる。その始原にカオスが描かれることがある。カオス的な存在が登場する神話は世界各地に数多くあるが、本論ではその一部として、ギリシア神話の『神統記』、中国思想に残る世界創成の場面として『三五歴記』、『老子』、『莊子』、『山海経』、日本神話の『日本書紀』に焦点をあて、それぞれの特徴を検討する。

2-2. ギリシア神話『神統記』-カオス

ギリシア神話の『神統記』は、羊飼い、農民で詩人であったヘシオドスが30歳時に詩的靈感を受けて詠みあげたゼウス賛歌の叙事詩である。まず序詞で詩歌女神によって目覚めさせられた詩人の告白から始まり、世界創成の場面が以下のように続く(以降、翻訳は廣川(1984)版を用いた。また、全ての引用文の強調は筆者によるものである)。

原初の生成 (116~121 行)

まず**原初にカオス**が生じた さてつぎに 胸幅広い**大地(ガイア)** 雪を戴くオリュポスの頂きに
宮居する八百万の神々の常久に揺ぎない御座なる大地と路広の大地の奥底にある暖々たるタルタロス
さらに不死の神々のうちでも並びなく美しい**エロス**が生じたもうた。

この神は四肢の力を萎えさせ 神々と人間ども よるずの者の胸うちの思慮と考え深い心をうち拉ぐ。

カオスの子 (122~125 行)

カオスから**幽冥(エレボス)**と**暗い夜(ニュクス)**が生じた

つぎに**夜**から **澄明(アイテル)**と**昼日(ヘメレ)**が生じた

夜が幽冥と情愛の契りして身重となり 生みたもうたのである。(廣川(訳), 1984『神統記』)

上述に続いて「大地(ガイア)の子」の生成の物語が述べられ、ウラノス、クロノス、ゼウスを中心とする3世代の王位継承神話が語られる。ここでは『神統記』の世界創成のプロセスを詳しく見たい。まず自然の力を象徴する原初の3神として、カオス、次にガイア、エロス²が生じる(116~120行)。ヘシオドスは、カオスは大気ではないと示している。廣川(訳)(1984)の

² 原初の神としてのエロスは、宇宙に作用する生成力そのものであり、後の神話の展開で登場する幼い天使の姿として表されるエロスとは別格のものである。

三田：ここに存在するカオス（混沌）の表象を追う

訳注では、このカオスは、ギリシア語の語源である空洞、裂孔の意味をもち、深淵などの抽象的な原理³ではなく、ある種のもので充滿した一種の実体的な存在として説明を加えている。この原初の3神は互いに直接交わることなく、エロスの生成力の作用を背景にして、カオスとガイアはそれぞれ無性発生によって自らより子を生ま出す。カオスは自らエレボス（幽冥・闇／男神）とニュクス（夜／女神）を生み出し、次の段階でエレボスとニュクスが情愛を交わし、アイテル（澄明）とヘメレ（昼日）を生み出した（123～125行）（図1）。エレボスはタルタロス（冥界）を永遠の闇で包み込み、神々すら怖気づく陰湿な雰囲気をもたらし、アイテルは白い光を永遠に照らして、神々の聖域オリンポスに荘厳さをもたらすという性質が訳注に示されている（廣川（訳）、1984）。Vernant（2001）の細密な解釈によると、エレボスとアイテルの2世代は、決して混じりあうことのない闇と光の対立関係に位置づけられる。一方のニュクスとヘメレの2世代は隣り合い循環性を維持し、世界に夜と昼の規則的なリズムをもたらしたとされる。これらのカオスから生み出された存在をカオス系統と呼び、その特徴の検討を進める。

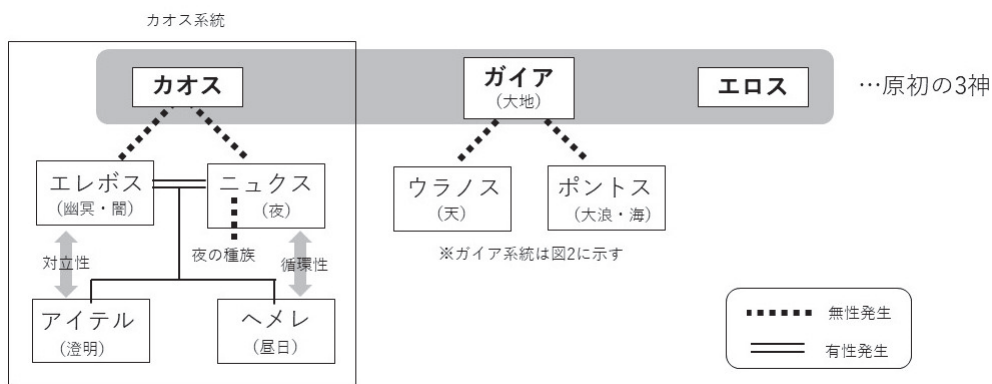


図1 原初の3神とカオス系統の神々（『神統記』廣川（訳）、1984に基づく筆者による作図）

このカオス系統の特徴を探るために、ニュクスから無性発生した「夜の種族」（ニュクスの子）を表1に示す。夜の種族は、争い・老齢・愛欲から死・死の運命・定業など、不吉さを漂わせる負性の神々である。続く神話の中では、ゼウスによってオリンポスの神々の世界から締め出され、人間界やタルタロスに抑圧されることになる。このようにカオス系統では、闇と光の二元的な対立関係、明と暗の循環性を同時に伴って世界を包摂し、夜の種族と呼ばれる不吉な気配を複雑に分化させていくプロセスがみられる。

表1 カオス系統：夜の種族（ニュクスの子）

| |
|--|
| 争い／老齢／愛欲／欺瞞／憤り／命運たち／運命たち／ 黄昏の娘たち／苦惱／非難／夢たち／眠り／死／死の命運／定業 |
|--|

次に、カオス系統の特徴と比較するために、原初の神ガイア（大地）の特徴を検討する。ガ

³ カオスは哲学用語として存在論や場の抽象概念の思索が深められているが、本論ではカオスの特徴を原典に添って検討する。

イアは、尊くそびえ立つ神々の住まいのオリンポスの山々から、地の底のタルタロス（冥界）まで続き、高さと深さの垂直性と広大な水平性を合わせもつ大地である（117～119行）。ガイアは無性発生によって、自らよりウラノス（天）とポントス（大浪・海）を生み出した（127行、130～131行）。次の段階で、ガイアは女神として自らが生み出した男神ウラノスとの交わりによって、第2世代のティタン族⁴、キュブクロス族、ヘカントゲイル族などの野生の神々を続々と孕まされる（133～154行）。しかし、子による王位奪取を恐れるウラノスは、ガイアの腹に子どもを押し戻し（154～157行）、ここから第2世代のクロノスを中心とする一連の権力闘争の王位継承物語が動き始め、第3世代のゼウスの誕生とオリンポスの神々による統治へ物語は展開する。このようにガイア（大地）は天、大浪・海という生命が活動する具体的な場を無性発生によって自ら生み出した後、有性発生によって多種多様な神々を産出したのである（図2）。これらのガイア系統には、場を形成する物質的な面と人格的な面の両方を複雑に分化させる特徴がうかがわれる。

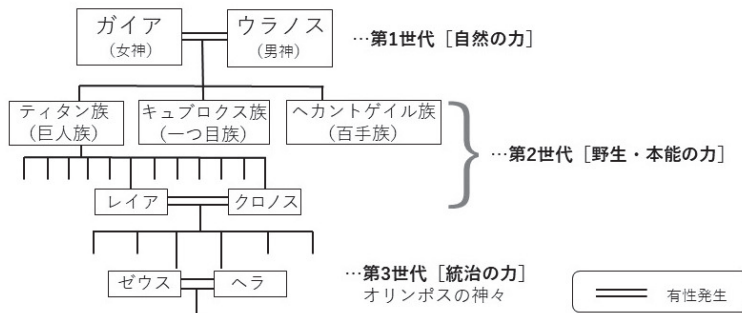


図2 ガイア系統の3世代の神々（『神統記』廣川（訳）、1984に基づく筆者による作図）

カオス系統とガイア系統の間での交わりが一切ないことから、両系統の存在の層が異なることが考えられる。Vernant (2001)は、カオスとガイアの間には原初的な緊張を孕んで互いの存在に深く関わりながら、直接的な交流や衝突をもたないことを指摘している。カオス系統の特徴は、対立と循環性をもって世界全体を包摂し、オリンポスの神聖さ、タルタロスの不気味さを漂わせるなど、特定の場の雰囲気にも強く影響を及ぼすことにある。さらに、この影響は信仰心、畏怖、猜疑心、不吉さなど潜在的な心理的要素を伴って、個々の運命を色づけてゆく。目に見えないかたちでカオス系統の影響を受けながら、ガイア系統の神々は人格化された姿をもって、大地を舞台にして物語が展開するのである。

2-3. 中国思想—混沌・渾沌

中国には文字で記録された古代神話は継承されていないが、遺跡から発掘された祭祀道具から多様な神話が存在した痕跡が示されている。その歴史的背景は、紀元前の春秋戦国時代に実利を重んじる儒教的な立場から神話などが批判的に整理され、経書の中に取捨選択され

⁴ ティタン族の形姿は、中近東の異国の神々に先例をもつ (Kerenyi, 1962 / 2000)。

三田：ここに存在するカオス（混沌）の表象を追う

(徐,1998; 伊藤,2013), 世界の起源には帝の存在が据えられるようになった経緯がある。中国の世界創成神話は、道学者の書『老子』(25章), 『淮南子』(3章・7章), 『列子』(1章)などに断片的に残されている。『淮南子』の世界創成場面と類似する内容が『老子』や『三五歴記』にも見られることから、『淮南子』の3章の一部(Kaltenmark, 2001)を示す。

「天地がまだ形のなかったとき、世界は**混沌**としてとらえどころがなかった。これを太始といった。やがて太始は**虚空**を生じ、虚空は宇宙を生じ、宇宙は気を生じた。気には境界があった。澄んで明るい気は、軽やかに上昇して、**天**となった。重く濁った気は、凝固して**大地**となった。澄んで明るい気はたやすく集合し、重く濁った気はなかなか凝固しなかった。このため**天**がまずなり、その後、**地**が定まった。**天地**の精気は重なり合って、**陰陽**となり、陰陽の濃い精気は春夏秋冬の四時となり、四時の精気は分散して万物となった。」(Kaltenmark, 2001 『淮南子』)

天地の未分化な状態の混沌から世界は始まり、やがて陽の澄んで明るく軽やかな性質が天となり、陰の濁って重い性質が地となり、性質の違いによって自然に分化していく様子が描かれている。陰と陽の対立、調和、相互関係によって世界を眺めるという伝統的な陰陽思想に貫かれている。

次に『莊子』の内篇 応帝王第七(原(訳), 1962)を示す。

南の海の帝を**儻**という。北の海の帝を**忽**という。中央の帝を**渾沌**という。儻と忽と、あるときいっしょに、**渾沌**の所で、あった。**渾沌**は大いにもてなした。儻と忽は、**渾沌**の好意におくいようと相談し、人には、みんな、ななつの穴があって、見たり聞いたり食ったり息したりしている、**渾沌**にだけそれがない、ために掘ってやろう、と言って、日にひとつずつ掘っていった。七日したら**渾沌**は死んでしまった。(原(訳), 1962 『莊子』)

『莊子』は、道教思想という無為の体現者を重視する立場から、渾沌を自然なもの、無意識的なものとして中央の帝に位置づけ、意識の偏重や作為を批判的に説く寓言である。「儻」と「忽」は軽率ですばやいという意味をもち、早合点する者のことである。この渾沌は儻と忽によって7つの穴（目鼻耳口）をあけられて、認識と言葉で定義する力をもつことで、渾沌としての本来性が失われて死んでしまう(貝塚, 1963)のである。この渾沌は、『山海経(センガイキョウ)』の西山経に登場する混沌がモデルになっているため、『山海経』の該当部に立ち寄りたい。『山海経』は来歴不明の古代の書で、人々が住む空間から離れた野生の空間である山、川、海の地理的な記述と共に、そこに住まう超自然的な神、鬼、幻獣、妖怪などの存在を絵と文によって記述したものである。怪物の集まりとして、儒教学者による整理から逃れたことで、中国古代神話のコスモロジーや混沌思想の一部が残されていると考えられる。以下に『山海経』(高馬訳, 1994)の西山経の記述と混沌の姿を図3に示す。

神がいる、その状(すがた)は黄色い囊の如く、赤いことは丹の火のよう、六つの足、四つの翼、**こんどん**として面も目もないが、この神は歌舞にくわしい。まことこれを帝・江である。(高馬(訳), 1994 『山海経』)



図3 混沌（『山海経』高馬(訳), 1994 より転載）

西山の天山の神混沌は目鼻口耳（7つの穴）をもたず、黄色の袋状の身体は赤い光を放つという独特の姿である。『山海経』に描かれる神や妖怪は、基本的に頭部、目鼻口耳、手足などを単数または過剰にもつ奇異な姿を特徴とし、現実世界の人や動物と区別される。その中において、混沌の完全に閉じた身体性は特異的であり、外界を認識する感覚器官をもたないことが、まさしく混沌の特徴といえる。身体は袋状の皮膚で包まれ外界から区分され、6本の足と4つの翼によって、天と地をゆっくりと浮遊する姿が想像される。さらに歌舞に詳しく、躍動的な生の一面も見られる。これらの特徴は、母胎と繋がりながら皮膚によって区切られて浮遊する胎児の姿のようでもある。荘子は、このような混沌の姿に、道教が大切にす道、無為、自然を託して寓言を述べたのだろう。『荘子』の渾沌に関する分析心理学的な検討は後の項で述べる。

2-4. 日本書紀—渾沌

中国の世界創成神話に関連して、『日本書紀』⁵の世界創成の場面を以下に示す。

古に天地未だ割れず、陰陽分れざりしとき、渾沌れたること鶏子の如くして、溟滓にして牙を含めり。其れ清陽なるものは、薄靡きて天と為り、重濁れるものは、淹滞みて地と為るに及びて、精妙なるが合へるは搏り易く、重濁れるが凝りたるは喝り難し。故、天先づ成りて地後に定る。然して後に、神聖、其の中に生れます。『日本書紀』

この『日本書紀』の冒頭部は、中国の『三五歴記』の世界創成場面が記された「古天地未割、陰陽不分、渾沌如鶏子、溟滓而含牙、…」という漢文がそのまま取り入れられているが、日本では中国思想のような天と地の対立は前提におかれていない(坂本ら, 1994)と考えられている。Kawai(1964/2009)は、世界創造の場面を他国から借り受けて一般論として述べて、自分たちの話を強化しようとするかたちは、世界の中でも珍しい日本の特徴だと指摘している。他から借り受けた渾沌は、その内容を吟味されることはなく、形式的に天地という舞台が整い、神聖が現れて国生み神話へ続く。これは日本神話に見受けられる生死をかけた対決を避けるかたちによる世代交代など、ギリシア神話的な激烈な対立が前提とされない日本的な特徴と関連していると考えられるだろう。本論では、『日本書紀』の世界創成場面の渾沌について漢文から借用するかたちを示し、そこに日本的な特徴が表れていると考えられることのみを示す。

⁵ 日本書紀の由来は、5世紀以降に大和朝廷の思想によって企図された国家成立の由来に関する政治的主張で、国家を正当視する目的をもつ点で、ふつうの意味での神話ではないとされるが、研究者によって異論もあり、議論されている(坂本ら, 1994)。

2-5. 神話領域のカオスのまとめ

これまでに検討してきた神話領域におけるカオスの特徴をここでまとめたい。ギリシア神話『神統記』では、原初の神カオスは、空洞、不可視的に漂うものという性質をもち、カオスから派生したカオス系統の神々は、闇と光の対立性、夜と昼の循環性といった場を包み込む包摂性をもって分化した。さらに、カオス系統はガイア系統と直接的に交わることなく、前者は潜在的で、後者は顕在的であり、その存在の層の違いが明示された。ギリシア神話の『神統記』と中国思想の世界創成には、天と地の由来、生成の力に異なる特徴がみられた。『神統記』では、カオスとガイアはそれぞれが無性発生によって次の世代を「生み出す」という産出の動きによって世界の構造が分化された。一方、中国思想では混沌から生じた性質の違いによって、天と地が自然に分かれ、陰陽が生じていく自然の流れによって世界が分化されていった。加えて日本神話では、渾沌から世界が生成される場面を他国の漢文から借り受けるかたちであった。世界を創成する原動力の性質の違いや、カオスが内包する性質とそれが語られる形式には、それぞれの民族の特徴が表れ出ていると考えられる。

3. 科学領域におけるカオス

科学領域でのカオスとは、外界に存在する観測対象の無秩序で予測不可能なふるまいを意味する。Prigogine & Stengers (1984/1987) は『混沌からの秩序』において、科学の歴史の変遷を紹介し、カオス的な現象が科学の対象に含められる過程を概説している。そこで同書からカオスに関する要素に焦点をあて、科学領域におけるカオスの特徴について検討を進める。

3-1. 科学領域におけるカオスの観測

まず Prigogine & Stengers (1984 / 1987) に示されたカオスの観測に関する概要を本段落に示す。17 世紀より物理学を中心とする古典科学では、ニュートンのモデルと呼ばれる機械仕掛けの世界観を措定し、因果論的、決定論的な物理的法則を発見して定式化することで自然法則を説明してきた。そこでは、過去・現在・未来を等質なものとして仮定する可逆的時間と、誤差が決して生じることのない理論上の仮想空間を措定し、いわゆる「神の視点」が用いられた。カオス的な現象は誤差や例外として巧妙に排除された経緯がある。このような古典物理学の発展によって、事物の本質は単なる原子の結合に過ぎないという科学的な世界観が広がり、人々は自然や神話的な世界との繋がりが絶たれることになった。やがて 19 世紀の産業革命に至ると、蒸気機関や機械の作業効率を研究する熱力学において、現実世界に沿った不可逆的な時間の中でカオス的な分子の振舞いを観測し、分子的無秩序を意味する「エントロピー」の概念が捻出された。これまで誤差や例外として排除されてきたカオス的な現象が、科学の研究対象に含まれることになる。そして熱力学、化学、生物学、生態学などの多様なカオス的な現象の観測を通じて、予測不可能な対象の無秩序なふるまいに、既存の秩序の破壊と新たな秩序の生成が併存することが報告されるようになる。さらに現在、量子力学が登場し、科学における 2 つの観測の不可能性を明らかなものとした。それは、①光速より速い速度での信号伝達の不可能性 ②素粒子の座標（位置）と波動（エネルギー）の同時測定の可能性である。科学が自然現象の観察

対象を拡張する中で、単純な線形モデルから複雑な非線形モデルによる説明へ移り、自らの学問の中に不可能性という限界を認めるという、科学的な大きな転換期を迎えていることが述べられている。Prigogine & Stengers (1984/1987)より、古典科学とカオス的な現象を扱う科学の特徴の比較を表2にまとめた。

表2 古典科学とカオス的な現象を扱う科学の特徴の比較

| 項目 | 古典科学 | カオス的な現象を扱う科学 |
|------------|---------------------------|---|
| 科学の系 | ニュートンの物理学 | 熱力学, 化学, 量子力学, 宇宙理論, 生物学, 生態学など |
| 時間 | 可逆的 (過去 = 現在 = 未来の等質性) | 不可逆的 (過去 ⇒ 現在 ⇒ 未来の一方方向性) |
| 空間 | 理論上の仮想世界 (神の視点) | 人間の生活世界 |
| 説明方式 | 因果論 定式によって予測可能 | 因果論 + 確率論 予測の不可能性を有する |
| 関係モデル | 線形モデル | 線形モデル + 非線形モデル |
| 物質の性質 | 不活性 | 平衡状態: マクロ的には不活性 平衡状態: ミクロ的には活性 非平衡状態: 活性 |
| 観測の対象 | 単純な挙動をする対象に限定 | 複雑な挙動をする対象を含む |
| カオス的な現象の扱い | 誤差や例外として排除 | エントロピー (分子的無秩序), 揺らぎ, 拡散, 乱流, 無秩序, 自己組織化, 突然変異などのカオス的な現象を観測して記述 |
| 不可能性の検討 | 普遍的モデル (不可能性は検討されない) | ①光速より速い速度での信号伝達は不可能 ②素粒子の座標 (位置) と波動 (エネルギー) の同時観測は不可能 |

これまで誤差や例外とされてきたカオス的な現象を熱力学によって科学の対象として取り入れていく時代背景と同時期に、深層心理学においても Freud がこれまで心理学の対象から捨象されていた無意識や夢に注目したことは周知のとおりである。産業革命という社会の大きな動きと連動し、科学と心理学は並行して展開している側面がうかがえる。熱力学の登場は、古典物理学が前提とした「神の視点からの観測」という特殊な条件を措定した観測から、現前的な人間の生活世界における観測へと降下していくプロセスを生じさせたと考えられる。また秩序と破壊の同時的な現象は、後の心理療法におけるカオスを考察する上で、重要な視座を与えるだろう。本項に示した科学領域におけるカオスの知見を含めて、続く分析心理学の観点と心理療法における検討を行う。

4. 分析心理学の観点からの検討

本項では神話と科学領域の検討を踏まえ、カオスに関わる Jung の解釈と共に、Jung と同時代の分析家による見解を示した後、現代の日本の心理療法にみられるカオスについて検討する。

4-1. カオスと無意識

世界創成神話にみられる原初のカオスは、分析心理学の観点では「無意識」のメタファーとして語られることが多い。Jung は無意識を Freud よりも広い意味としてとらえ、無意識を定義

するのではなく、「無意識に関しておもしろいことは、正にそれが本当に無意識であることだ」と、意識できないものとして理解していたという(Meier, 1984/1996)。Jung と交流の深い中国思想研究者 Wilhelm は、前述の『莊子』の混沌を「無意識」としてドイツ語翻訳した(Jung & Wilhelm, 1948/2004)。同じく混沌について分析家 von Franz (1972/1990)は、前意識的な全体性であり、意識と無意識の間にある未知のものと解釈を示している。さらに分析家 Neumann (1949/2006)は、多くのシンボルを用いて世界創成神話には元型的な人間の意識の発達の過程が投影されていることを示した。そして神話に見られる世界の始原について、未分化な原始的な精神状態、完全性、全体性そのものであり、概念的な把握は不可能でシンボルが集中的に集まることで未知のものを言い換えによって表現するという特徴を強調している。このように神話的なカオスの表象は、分析心理学の観点では、無意識、前意識、完全性、全体性、未分化な精神状態、前言語的といった個人および人類の内的な精神の様相として解釈されていると考えられる。

次に心理療法の二者関係の間で生じるカオスについて検討する。Jung (1958/1994)は心理療法における転移現象を錬金術⁶のイメージを通して研究し、転移現象で生じる無意識的な混沌を錬金術の「第一質料」と同義語とした。Jung の説明によると、心理療法の過程で医師と患者との無意識の内容が投影されるかたちで転移が布置される時、医師と患者は無意識的な内容の中に置かれて見通しがきかなくなり、暗く黒く、対立物同士の危険は緊張ははらみ、混沌とした状況が生じるという。このような混沌とした無意識的なものは、投影という回り道を通してのみ意識化されて統合できるものと考えられている。二者関係に生じる混沌とした無意識的な転移現象は、錬金術の「第一質料」のイメージを介することで、内なる作業の始まりと位置づけられている。

カオスは、個人の内的な精神として閉じたものに限られず、二者関係の間で生じる無意識的な蠢きを含んでおり、そこに心理療法の始まりという価値が見出されている。

4-2. 世界創成神話の重要性

神話学者 Kerenyi (1951/1975)によると、神話はそれぞれの民族の根源と根拠について伝えるもので、生命の萌芽と精神的な萌芽を含んでいる。人々は世界創成神話に立ち還ることで、その原初的な生成のエネルギーを再体験し、生の力を得ることができるという。Jung (1951/1975)は宇宙創成神話に登場する神々の両性具有の原存在を、無意識的全体性のひとつの投影と考え、この原存在は自己のシンボルとなって人間の自己実現のはるかな目標となり、対立物の葛藤が鎮まると述べている。原初的なカオスは、その原存在の根源に位置づけられることから、心理療法の中で重要なテーマとなり得るだろう。

では心理療法の過程において、存在の始原を問う内的な動きとはどのようなものだろうか。本論では限定的になるが、分析家 von Franz (1972/1990)の見解を以下に示す。ボーダーライン的な症例では、意識的な現実認識の破壊と共に新しい意識の再建が見られ、意識が飛躍的に成長する時には先立つ夢があり、そこに世界創造神話のモチーフが含まれるという。また、個人が肉体的に脅かされたり、分離に脅かされたりする時に、無意識的に世界創成神話が語り直さ

⁶ 中世に発展した錬金術は化学的な化合、つまり物質同士を結合させる力について、人間の性的な関係を伴う結合や神話的な対立の結合といった元型的なイメージを用いて暗喩的に錬金の過程を示している。

れ、意識的な生命を取り戻し、現実を再び認識しようとする。さらに統合失調症の症例では、世界崩壊の夢が発症の前触れとなり、その人の主観的な世界も実際に粉々になろうとしていることの表れと見なされることもある。この臨界点を脱すると、幻覚や夢の中に世界創成神話のテーマが現れ、新しい意識的な人格が再建される過程を辿る。クライアントが破壊性に圧倒される中で、再創造のテーマの出現をセラピストが理解し、意識的な層を越えて共有することの重要性が述べられている。

自我意識や認識世界が一旦確立した後に、ここが神話的なカオス、つまり存在の始原への回帰を求める時、世界創成神話のイメージが自ずと浮かび上がり、内的な生成と破壊が生じてくるものと考えられる。

4-3. 世界創成神話の裏面にある世界崩壊不安

心理療法の過程では、重要な局面で世界創成の神話的なイメージが生成される一方で、世界崩壊という原初的な不安に晒される側面も見受けられた。この世界崩壊のテーマは、当然ながら世界創成神話には描出されない。『神統記』では、タルタロス（冥界）という闇の場が定められ、ゼウスによって抑圧された神々が送り込まれることで、世界崩壊は前提にされない。また、中国の陰陽思想では、生と死は循環性を持ち、原初的なカオスへ回帰することで、世界崩壊の不安から守られているといえる。他の神話の検討は今後の課題となるが、世界創成神話の裏面にある世界崩壊や存在が解体されるような根源的な恐怖は、わたしたちの心の中に確かに存在する。それらは夢や妄想に表出し、時には人格を破壊するほどの深い病理を引き起こす原初的な破壊力を有しているといえる。これは原初のカオスの生成力の裏面に伴う破壊力であり、存在の起源を辿る世界創成神話では語られることのない抑圧された側面と考えられる。この点について、科学領域では、カオスの現象の中に古い秩序の破壊と新たな秩序の生成が同時に併存する状況が観測されている。外界の対象の観測によって示される内容には、人間の意識にとって耐え難い破壊的な側面が含まれており、心理学的に検討する価値を有していると考えられる。

4-4. 現代の日本の事例にみられるカオス

これまで前世紀の分析心理学的な見解を中心に検討してきた。現代の日本では、乳幼児期の子どものプレイセラピーや発達障害に関わる心理療法において、原初的なカオスを考察する事例報告が積み重ねられている。そこでは自他未分化な状態、言語以前の段階といった原初的な状態像が示され、クライアントとセラピストが共生的な関係に至りながら、同時に自他の分離が生じる機微が捉えられている(片山,2000; 河合・田中(編),2016; 藤巻,2020)。これらには二者関係成立以前の段階、つまり自他未分の融合的な状態から「主体」を立ち上げるプロセスが論じられている。神話的な原初のカオスが世界を分化させる最初の蠢きと重ね合わせることで、心理療法のプロセスとして理解を深めることができるだろう。

5. まとめ

5-1. 各領域のカオスの表象

これまでに検討した3つの領域のカオスの表象の特徴を表3に示す。神話におけるカオスは、

三田：ここに存在するカオス（混沌）の表象を追う

原初的な世界の根源であり、あらゆるものの以前に位置づけられた。これらは分析心理学の観点から、無意識、原始的な精神や全体性を表わすメタファーとして理解される。このように原初的なものは、意識による概念的な理解や把握ができないことから神話的な象徴やイメージによって体験するほかない。心理療法では内界の成長や危機に伴って、世界創成神話のモチーフがイメージや夢に生じるプロセスがみられる。同時に原初的なカオスが有する破壊性は、世界崩壊不安のような妄想や夢として現出し、時に人格の崩壊をまねきかねない側面を孕む。この破壊性は世界創成神話に決して描出されないが、科学領域ではカオス的な現象の観測によって、生成と破壊、秩序と無秩序の併存が多く示されている。神話領域と科学領域の双方から得られるカオスに関する知見は、心理療法の過程で生じる無意識的な転移のプロセスや、内界に生じる破壊と生成の現象を理解する上で、重要な示唆を提供するだろう。

表 3 各領域のカオスの特徴

| 領域 | 表出される範囲 | 意味するもの | カオス（混沌）の特徴 | 表象 |
|---------|-------------------|-------------|---|----------------------|
| 神話領域 | 世界創成神話 | 世界の原初 | 始原、空洞、包摂性、未分化の状態 | 不可視 |
| | 中国思想（荘子） | 道 | 無為、自然、無意識 | 神の姿 |
| 科学領域 | 外界の自然 | 対象の無秩序なふるまい | 不可逆的時間・乱雑性・偶然性によるカオス的な現象、秩序と無秩序の併存 | 経時的な観測値 |
| | 人の内界 | 無意識、前意識 | 全体性、完全性、原始的な精神、未知の領域 | 神話的な象徴やイメージ |
| 分析心理学領域 | 心理療法における無意識的な転移現象 | 第一質料 | 対立物同士の緊張、四元素間の反目、治療者と患者の無意識的内容、錬金術の作業の始まり | 錬金術のイメージ 投影を通じて発見 |

5-2. 心理療法におけるカオスの検討

これまでカオスについて、原初、根源、無為、無意識、全体性、乱雑性、秩序と無秩序の併存といった内容を汲み出した。心理療法におけるカオスの意味を整理すると、表 4 のように 3 つの観点に分けられる。第一は心理療法で生じる個人の内界の動き、次に二者関係における転移現象、第三に人類の精神発達の観点である。

まず個人の内界に表れるカオスの表象は、時間的な側面から 2 つに分けられる。1 つめは原初的な世界へ時間的に遡行する動きであり、2 つめは未分化な状態から性質が複雑に分化する経時的な発達のプロセスである。前者は、精神の危機的な状況においてクライアントの夢やイメージに世界創造の原初のモチーフが生じることを前述した。この内的な動きは、古い秩序の破壊と新たな可能性の生成が同時に生じる臨界点ともいえる緊張を伴い、世界崩壊的な不安が生じ得る。この生成と破壊の両義性が併存する状況は、科学領域でのカオス現象の秩序の破壊と生成の知見をメタファーとして用いることで、内界の不可視な現象について理解を深めることができるだろう。次に、後者の発達のプロセスについて、現代の発達障害を抱える子どものプレイセラピーや心理療法において、自他未分化な在り方としてカオス的な表象をセラピストが共に体験して意識化することは、プロセス上で大切な契機と考えられている。心理療法において表出されるカオスの表象について、遡行の動きか、発達のプロセスの原点か、セラピストが見分けることは重要であろう。

表 4 心理療法におけるカオス

| 観点 | 内容 | 動き |
|------------|----------------|----------------------------------|
| 個人の内界の動き | ・ 原初への逆行 | 危機的狀態⇒原初の状態（生成と破壊の併存） ⇒世界の再創造 |
| | ・ 発達のプロセスの原点 | 未分化な状態⇒分化した状態 |
| 二者関係における現象 | ・ 無意識的な転移現象の布置 | 内的作業の始まり |
| 人類の精神の発達 | ・ 原初的な精神 | 集合的で未分化な意識⇒個人的な意識 |

第二に、二者関係における無意識的な転移現象としてのカオスの表象は、分析心理学では錬金術のメタファーを用いて説明された。ここでは、改めて現代の科学領域のカオスに関する知見を加えて、心理療法における二者関係の考察を試みたい。科学領域のカオス的な現象の観察を通じて、素粒子の座標（位置）と波動（エネルギー）の同時観測は不可能であることが証明されている。この不可能性を心理療法として検討すると、心理臨床家は、今この瞬間に現前するクライアントの存在と、連続的な軌跡としての面接プロセスを同時に見ることは困難であると考えられる。心理療法のプロセスを見直す時、眼前のクライアントを鋭く感知することはできなくなる。しかし、その限界を理解した上で、心理療法のプロセスと眼前のクライアントの存在の二重性をもって見守ることが求められる。また、こころに関する因果関係的な線形モデルの定式に限定するのではなく、「今、この場にいる私とあなた」という現前する存在に基づいて、予測不可能性や偶然性、複雑性に関わってクライアントに出会おうとするセラピストとしての在り方を学ぶことができる。

第三に、分析心理学の観点でカオスは、人類の精神発達上における無意識、前意識、言語以前などの原初的な精神のメタファーとして解釈された。例えばギリシア神話『神統記』のカオスでは、自ら闇から光を生み出し、複雑に心理的な要素を分化させる過程が描かれていた。また、現代の科学領域では、カオスの観測と光の性質の研究を通して、光速よりも速い速度の情報伝達の不可能性が示されている。科学が自らの中に観測の不可能性という限界を定めたように、カオスと光のメタファーを通して、意識的な世界の限界に直面する時代を迎えていると考えられる。セラピストがクライアントの深層と現前性の双方に関わる上で、カオスに関する古の神話と最前線の科学的ものの見方の双方を射程におさめて、心理療法におけるカオスの理解に取り組むことは、決して迂遠ではないだろう。

最後に本研究の限界と課題について述べる。本論では初期の分析心理学の文献を中心に検討したが、現代の日本の事例研究からの詳細な精査や、カオスの表象の実態調査などは今後の課題に挙げられる。本論のようにカオスについて記述する試みは、荘子の寓言が示すとおり、カオスが本来もつ無限の魅力を無味乾燥なものに貶める危険性を孕んでいる。そこで芸術や表現領域からの検討も求められる。

6. 引用文献

藤巻り (2020). 発達障害児のプレイセラピー—未分化な体験世界への共感からはじまるセラ

三田：ここに存在するカオス（混沌）の表象を追う

- ピー．創元社．
- 原富男 (1962). 現代語訳 莊子．春秋社．
- ヘシオドス (不明). 神統記．廣川洋一 (訳) (1984). ヘシオドス 神統記．岩波書店．
- 伊藤清司 (2013). 中国の神獣・悪鬼たち—山海経の世界 増補改訂版．東方書店．
- Jung, C.G. (1958). *Die psychologie der ubertragung*. Rascher, Zurich. 林道義・磯上恵子 (訳) (1994). 転移の心理学．みすず書房．
- Jung, C.G. & Kerényi, K. (1951). *Einführung in das wesen der mythologie : Das gottliche kind; das gottliche madchen*. Rhein-Verlag, Zurich. 杉浦忠夫 (訳) (1975). 神話学入門．晶文社．
- Jung, C.G. & Wilhelm, R. (1948). *Das geheimnis der goldenen blüte: Ein Chinesisches lebensbuch*. Rascher Verlag, Zurich. 湯浅泰雄・定方昭夫 (訳) (2004). 黄金の華の秘密．人文書院．
- 徐朝龍 (1998). 三星堆・中国古代文明の謎—史実としての『山海経』．大修館書店．
- 貝塚茂樹 (1963). 中国の神話．筑摩書店．
- Kaltenmark, M. 第 9 章 東アジア・内陸アジアの神話・宗教—中国の宇宙創成説, イヴ・ボンヌフォワ (編) 金光仁三郎 (訳) (2001). 世界神話大事典．大修館書店． pp. 1111-1112.
- Kawai H. (1964). *The hidden gods in Japanese mythology*. Daimon Verlag, Einsiedeln. 河合俊雄・田中康裕・高月玲子 (訳) (2009). 日本神話と心の構造—河合隼雄ユング派分析家資格審査論文．岩波書店．
- 河合俊雄・田中康裕 (編) (2016). 発達の非定型化と心理療法．創元社．
- 片山知子 (2000). プレイセラピーにおける混沌と言葉, 箱庭療法学研究, 13(1), 3-14.
- Kerényi, K. (1962). *Die religion der Griechen und Romer*. J.G. Cotta'sche Buchandlung Nachfolger, Stuttgart. 高橋英夫 (訳) (2000). 神話と古代宗教．筑摩書房．
- Meier, C.A. (1984). *The unconscious in its empirical manifestations: Psychology of C.G. Jung, Vol 1*. Sigo Press, Boston. 河合隼雄 (監) 河合俊雄・森谷寛之・矢部文治 (訳) (1996). 無意識の現れ—ユングの言語連想検査にふれて・ユング心理学概説 1. 創元社．
- 森三樹三郎 (1994). 老子・莊子．講談社．
- Neumann, E. (1949). *Ursprungsgeschichte des bewusstseins*. Rascher Verlag, Zurich. 林道義 (訳) (2006). 意識の起源史<改訂新装版>．紀伊國屋書店．
- Prigogine, I. & Stengers, I. (1984). *Order out of chaos: Man's new dialogue with nature*. Bantam Books, New York. 伏見康治・伏見譲・松枝秀明 (訳) (1987). 混沌からの秩序．みすず出版．
- 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋 (校注) (1994). 日本書紀 (一)．岩波書店．
- 高馬三良 (訳) (1994). 平凡社ライブラリー34 山海経—中国古代の神話世界．平凡社．
- Vernant, J. P. 第 3 章 ギリシアの神話・宗教—ギリシアの宇宙創成神話, pp. 272-280. イヴ・ボンヌフォワ (編) 金光仁三郎 (訳) (2001). 世界神話大事典．大修館書店．
- von Franz, M. L. (1972). *Patterns of creativity mirrored in creation myths*. Spring Publications. Zurich. 富山太佳夫・富山芳子 (訳) (1990). 世界創造の神話．人文書院．

(臨床心理学コース 博士後期課程 2 回生)

(受稿 2021 年 8 月 31 日、改稿 2021 年 12 月 24 日、受理 2022 年 1 月 6 日)

こころに存在するカオス（混沌）の表象を追う

—神話・科学の領域と分析心理学の観点からの検討—

三田 桂子

心理療法の過程では、カオスの表現や状況が生じることがあり、そこには重要な契機が含まれている。本論では心理療法における「カオス（混沌）」を分析心理学の観点から神話や科学領域におけるカオスの特徴を検討することを目的とした。神話領域のカオスには、原初、空洞、包摂性、未分化などの特徴があり、分析心理学的には無意識、原初的な精神のメタファーや二者関係の転移現象として理解された。科学領域では、予測不可能なカオスの現象の観測によって秩序と無秩序の併存が示された。心理療法の過程においても内的に重要な局面で世界創成的なイメージが生成される一方、世界崩壊という原初的な不安に晒される側面がみられた。しかし世界創成神話では破壊的な側面は描かれることはない。このようなカオスの生成と破壊の両側面の特徴は、神話と科学の領域から検討することによって、心理療法に生じるカオスについて理解を深めることができる。

Exploring the Representation of Chaos Existing in the Mind: Study in the Fields of Myths and Science from the Perspective of Analytical Psychology

MITA Keiko

Chaotic expressions and situations may occur in psychotherapy, which include important momentum. This paper explores the characteristics of "Chaos" in psychotherapy to examine the fields of mythology and science from the perspective of analytical psychology. In the mythical realm chaos is characterized by primitive origins, cavity, inclusiveness, undifferentiation. It is understood as a metaphor of the unconscious, primitive mind, and transference phenomena of relationships in analytical psychology. In the field of science, chaotic phenomena are considered the disorderly behavior of unpredictable objects, and order and disorder are observed to coexist in it. In the internally important phase in the psychotherapy, while the image of creation myths is generated, there is another aspect of being exposed to the primitive anxiety of the collapse of the world. Destructive aspects are not depicted in creation myths. The characteristics of both sides of the generation and destruction of chaos could be deepened in psychotherapy by examination from the perspectives of mythology and science.

キーワード：カオス（混沌）、世界創成神話、科学、無意識

Keywords: Chaos, Creation myths, Science, Unconscious